

經濟論叢

第145卷 第5・6号

哀 辞

故前川嘉一名誉教授遺影および略歴

アリストテレスの表券貨幣説(2)……………本 山 美 彦 1

標準商品の考え方をマルクスの問題に

応用する可能性について(2)……………岡 敏 弘 21

費用削減投資と参入阻止行動……………林 田 修 35

N人非協力交渉ゲームについて……………湯 本 祐 司 50

両大戦間期における地方有力銀行……………東 憲 弘 67

顧客情報の集積・利用と経営戦略の再編……………西 山 賢 一 97

追 憶 文

前川嘉一先生のお仕事と思い出……………菊 池 光 造 120

前川嘉一先生の思い出……………赤 岡 功 124

平成2年5・6月

京都大學經濟學會

アリストテレスの表券貨幣説

—ノミスマの射程(2)—

本 山 美 彦

III 『政治学』の貨幣と『倫理学』の貨幣

マルクスと同じく、シュンペーターもまた、アリストテレスを交換価値の発見者として評価する。アリストテレスは、たとえば、最善の国家、善なる生活、至高善、正義、といった様々の価値判断に制約されていたという点で、プラトンなどの先行者と異ならないが、それでも、分析的な思考方法において、他のギリシャの哲学者を凌駕しているとシュンペーターは言う（Schumpeter, [33] p. 57; 邦訳，第1分冊，110ページ）。シュンペーター自身は、アリストテレスの関心が、経済現象の分析にあるのではなく、経済社会学と専門技術的経済学との両者を従属させる政治社会学の分析にあったことを承知していたが、それでも、『政治学』、『ニコマコス倫理学』の2著は、一個の統一的社会科学の最初に現れた体系的叙述になっていると評価し（*Ibid.*, p. 58; 邦訳，第1分冊，111-12ページ），アリストテレスの理論こそは、歴史上初めて、経済思想の次元をつき抜けた経済分析の要素を含んでいると判断する⁹⁾。

9) しかし、たとえば、シュンペーターの、前号の引用文の後半部分の「農夫が靴工に対するように」という語句についてのつぎのような解釈は、費用価格論の次元にアリストテレスの均等概念を押し込めてしまっている。

「『農夫の労働が靴工の労働と比較されるように、農夫の生産物が靴工の生産物に比較される』というように私は解釈する。少なくともこの文章からはそれ以外に読み取れないのである。もし私が正しいのなら、アリストテレスは明瞭に叙述できなかったにせよ、なんらかの労働費用価格論を手探りしていたのだということになる」(Schumpeter, [33], p. 60, note 1; 邦訳，第1分冊，119ページ)。

この箇所も正しくは、共同体関係維持にとっての大工と靴工の必要性（クレイア）に応じて、農夫の生産物と靴工の生産物が比例的に配分されるべきであることが言われているのであって、投入労働費用に比例した配分が論じられているのではない。そもそも、ここは *creia*、そして *nomisma* が共同体との関係で論じられている箇所である。

シュンペーターの言う経済分析とは、経済問題を分析するさいの知的技術的手続きを指し、その分析装置は、導かれる結論なり主題なりとは独立して、それ自体に価値をもつものという定義が与えられている。経済思想とはそういう科学的な側面をもたない経済現象の単なる記述であるということになる。

「私がこの用語で意味しようとしていることは、……経済現象を理解するべく人々が払う知的努力、同じことだが、……経済思想のうちの、分析的、科学的側面のことである」(Ibid., p. 1; 邦訳, 第1分冊, 17ページ)。

「経済分析とは、人々がどのようなときに、どのような行動をとるのか、人々がそうすることによって生みだされる経済的效果とはどのようなものなのか、といった問題を扱うものである。また、経済社会学というものは、人々が、どのようにしてそのような行動を取るように至ったのかの問題を扱うものである」(Ibid., p. 21; 邦訳, 第1分冊, 38ページ)。

しかし、経済学は他の科学と異なって、そのような経済分析の起源を探ることには大変な困難を伴う。

「他の分野では例外なく、常識的知識で達成できる科学的知識はたいしたことではないのに、経済分析の分野においては、常識的知識が我々の達成できる科学的知識の深くまで到達できる。素人でも豊作があれば食糧価格の低下があり、分業によって生産過程の効率が増すという知識をもっている。しかし、それらが科学以前のものであることは明白である。古代の著作の中にその文言があるからといって、それらが発見を含んでいると指摘することは馬鹿げている」(Ibid., p. 9; 邦訳, 第1分冊, 17ページ)。

「古典の研究者や古代経済の研究者が、後世の発展を示唆するあらゆるものを発見したとして、(過去の論者を)誤って賞賛することがよくある。そこで忘れられているのは、基礎的な事実の表明が重要になるのは、それらの事実でもって上部構造が作られるときのみであるということである。これは、他の分野でも言えることである。過去の理論は、上部構造を欠いているというのが一般的なのである」(Ibid., p. 54; 邦訳, 第1分冊, 102ページ)。

科学という定義をこのように厳密に行なえば、古代ギリシャ思想には見るべきものはない、というのがシュンペーターの考え方である。経済分析を導いた点にギリシャ人たちの功績を認めながらも (*Ibid.*, p. 57; 邦訳, 第1分冊, 110ページ), 彼はクセノホンのオイコノミカの価値を無視し、分業の事実を重視するその視点を単なる経済思想であると退けている¹⁰⁾。アリストテレスですら、他の分野で達成した業績の大きさに比して、経済学の分野における業績があまりにもささやかすぎ、常識論をわずかに越え出たにすぎないが (*Ibid.*, p. 57; 邦訳, 第1分冊, 109-10ページ), クセノホンやプラトンに比して、アリストテレスには経済分析の萌芽があり (*Ibid.*, p. 57; 邦訳, 第1分冊, 110ページ),

10) 経済分析の歴史、それも現代のパラダイム転換を伴わない歴史叙述の妥当性に私は疑問をもつのだが、よしんばシュンペーターの言う経済分析の歴史の存在意義を認めたとしても、シュンペーターがクセノホンの価値を一蹴したことは解せない。クセノホンは、市場の広さが分業の広がり制約するというアダム・スミスを想起させる論理を提供しているからである。たとえば、ペルシャの宮殿では、専門の料理人によって食事が供与されるので、素晴らしい食事となるという説明に、その論理が見られる。

「このようなことがあるのは驚くべきことではない。大きな都市では様々の職業が最高度に発達しているように、宮殿における食事も同じようにじつに素晴らしい仕方で提供されるようになっている。小さな町では、荷馬車、ドア、犁、食卓、等を同じ人が製作する。その人が家すら作ることもしばしばある。その人は、自らの生計を立てるのに十分な様々の仕事を見つけることさえできれば感謝するほどである。しかし、1人の人が多くの職業をもつとき、そのすべてをうまくこなすことなど不可能である。逆に大きな都市においては、どの職業に対しても多くの需要があるので、たった1つの職業でもって1人の人間を扶養することができる。多くの場合、それは一つの職業の一部分で十分である。たとえば、ある人は男性用の靴を作り、別の人が婦人用の靴を作る。1人の人が靴の修理だけで生計を営める場所もある。そこでは靴の型を作る人、靴の上部を縫う人がある。このような作業をまったくせずに、靴の部品を集積する人もいる。非常に特化された仕事をする人は、当然ながらその仕事を最高度になしとげるのである」(Xenophon, [45], 8. 2. 5)。

このクセノホンの説とアダム・スミスの説とを比較するとき、そのあまりにも大きな類似に驚かざるをえない。スミスのこの言説は、1763年4月5日付けのスミスのノートに見られるもので、ミークとスキナーによって評価され直したものである (Meek & Skinner, [22], pp. 1094-1116)。スミスの言葉はつぎのようなものである。

「我々は以下のように観察することができる。……分業は人が生産した商品に対する市場によって直接的に引き起こされる。市場によって人は1つのものをすべてのものに交換することができるので、この分業は市場によって大きくなったり、小さくなったりする。……まず、市場の存在が分業を引き起こし、市場の大きさが人の労働をどの程度の大きさに分割するかを決める。1国の大工といっても、荷馬車大工もあれば、家大工もあり、ドア職人もあれば、家具職人もある。木製ナイフ職人もある。これらすべてが、町において別々の仕事をしているのである」(*Ibid.*, p. 1110 より引用)。

後世への影響力も大きく、スミス『諸国民の富』もその影響下にあったとシュンペーターは言う (*Ibid.*, p. 60; 邦訳, 第1分冊, 118ページ)。

「アリストテレスは、正しくも経済分析の基礎に欲望とその充足を置いた。そして、自足する家計経済から論を始めて、分業、物々交換に進み、さらに直接的な物々交換の困難さを克服する手段としての貨幣導入を論じた。そのさい、富と貨幣を混同する誤謬には当然にも厳しく批評した。しかし、〈分配〉の理論はもたなかった。以上のものは、経済理論に関するかぎり、ギリシャの遺産になっている。……『諸国民の富』の最初の5章はこれと同じ方向への推論の発展した姿に他ならない」 (*Ibid.*, p. 60; 邦訳, 第1分冊, 118ページ)。

シュンペーターは、アリストテレスの上記2著の中に経済分析の萌芽をつぎつぎに取り出して見せる。たとえばアリストテレスには、後の世代の著作にも見劣りしないほどの明瞭な使用価値と交換価値との区別がある。市場価格論の展開はないが、独占価格の問題が不正義の観点から論じられている。価格形成における正義の基準が交換における「等量性」(equivalence) の中に見出されている。ある種の神秘的な価値実体よりも、むしろ、単純に貨幣という尺度で表現された市場における交換価値が考えられることによって、正常条件における自由市場の競争価格が公正価格と認められている (*Ibid.*, pp. 61-62; 邦訳, 第1分冊, 120-21ページ), 等々である。しかし、マルクスと同じくシュンペーターもまた、アリストテレスの均等性を交換価値的な意味での等量性, 同等性と受け取るという誤りを冒したのである。

「正義の条件は、あらゆる交換ないしは売買の行為における、それらの同等性 (equality) によってかなえられるであろう。すなわち、Aが靴をBの数片のパンと物々交換するときには、アリストテレスの正義は、両種のものがおのおのの正常的競争価格によって比較されるときに、靴とパンの数片が等しいことを要求する。またAがBに靴を売って貨幣を得るときには、Aが受け取るべき貨幣の数量を決定するさいに、同じルールが作用するのである」

(*Ibid.*, p. 62; 邦訳, 第1分冊, 121ページ)。

このように、正義の観念がアリストテレスの市場分析、商品交換を律する競争価格、正常価格の分析を生んだとするシュンペーターは、アリストテレスの貨幣論を一種の商品貨幣論として、つまり、その根拠を内在的価値にもつ特定の商品が貨幣に転化するという金属貨幣説として理解する。

「アリストテレスは、たとえば金属のようなある種の商品が他のものよりもこの役割によりよく適しているという事実を簡単に述べ、……交換における等量性 (equivalence) における彼のルールの必要条件として、価値の尺度としても使用される交換手段を必然的に導入することになった。しかし彼は、少なくとも暗黙裡に、それが価値の貯蔵手段としても用いられることを認識していた。こうして、19世紀の教科書で伝統的に挙げられている貨幣の4つの役割……第4の役割は延期した支払いの基準として役立つこと……のうちの3つまでが、アリストテレスに源を見出せるのである」(*Ibid.*, p. 62; 邦訳, 第1分冊, 122-23ページ)。

シュンペーターのこの結論は、アリストテレスのつぎの章句を根拠としている。

(引用文12)「ところが、ここからしかるべき道理によってあの蓄財術 (*crematiske*) が生じた。国と国との間で、欠けているものを輸入し、余っているものを輸出するという相互扶助が、これまで以上に行なわれるようになったとき、貨幣の使用が必然的に工夫されるようになった。なぜなら、自然によってもたらされる生活必需品は、いずれももち運びが容易でないからである。ここから、自らが有用なものの1つで、生活のために取り扱い易いという効用をもっているようなもの、たとえば、鉄、銀、あるいは何か他にふさわしいものがあれば、それを交換のために与えたり、受け取ったりしようということを相互の間で取り決めた。この種のものの価値は初めのうちは単に大きさとか重量によって計られていたが、しかし、ついには計る面倒を省くために、刻印がその上に捺されるようになった。刻印はどれだけかとい

うことを印すものであった」(Aristotle, [4], 1157 a 31-42; 邦訳, 52-53ページ)。

シュンペーター自身の金属貨幣説の定義は、交換手段として役立つために貨幣自体が交換に役立つ商品でなければならないということと、貨幣が貨幣的役割とは別個に交換価値となる内在的価値をもつべきである、とする立場である。そのさい、便宜的に、貨幣の品位、重量を保証する刻印が貨幣の上に押されるようなことがあっても、刻印自体で価値が発生するのではない (Schumpeter, [33], p. 63; 邦訳, 第1分冊, 124ページ)。貨幣は共同体間の交易が発達することによって発生することになった。それは、遠距離の交易に必要な交換手段としては、自然的な生活必需品ではもち運びに不便である。ここに自ら有用物であり、かつ、取り扱いやすいものが貨幣となる。この章句を前後の文脈から離して、逐語的に語を拾えば、確かにここでは、金属貨幣説が展開されているように見える。

しかし、外国貿易の便宜のために、貨幣が生み出されたという章句を金属貨幣説の論拠とするには、全体の文脈から見てかなり無理があるだろう。少なくとも、アリストテレスのこの章句に関するかぎり、貨幣の諸性質のうちの铸貨的性質の根源のみが、共同体間の外国貿易に求められているのであって、共同体内部の貨幣の本質そのものが指摘されているわけではない。共同体と共同体との間の交易に金属铸貨が使用されながらも、その交易が一般的になり、象徴としての信認さえ得れば、貨幣の素材的内容は問われるものではないし、1つの共同体内部では象徴化そのものが現れるはずである。そのさい、共同体内部におけるような国家的保証のない共同体外部との交易では、金属铸貨が使用されることに貨幣の本質を見るのか、次第にそれすら象徴化されることにその本質を見るのか、といったことの正否は即断できないことであろう。たとえば、共同体の外における交易では金属铸貨が使用されることは、すでにプラトンによって指摘されている。にもかかわらず、シュンペーターはプラトンを金属貨幣説として見るのではなく、共同体内部の貨幣の象徴化を指摘している箇所の

みを重視して、彼を表券貨幣説の始祖と見なすという片手落ちの判断をしてしまった¹¹⁾。

ただし、理論的金属貨幣説の嚆矢をアリストテレスに求めながらも、その判定に絶対的な自信をもっているわけではないことを、シュンペーターはすぐに告白する。

「ところが『倫理学』においては、通用している鑄貨のギリシャ語 (*nomisma*) にちなんで、貨幣はその〈本来的性質〉によって存在するのではなく、慣習もしくは法 (*nomos*) によって存在すると述べられている。これは〈上述したことと異なる〉方向を指しているように思われるかもしれない。その意味を説明して、社会が貨幣を変更し、貨幣としての性質を除くこともできると彼は付言した。しかし、ここでは、慣習や法が貨幣鑄造に使用されるべき材料と鑄貨に付与されるべき特殊な形態を決定する、ということ以上の内容が意味されているわけではない」(*Ibid.*, p. 63; 邦訳, 第1分冊, 115ページ)。

「当然そうすべきなのだろうが、我々は他の章句に立ち入らない。これらの章句は最悪の場合でも、アリストテレスが貨幣はそれ自体の性質上、当然商品である材料から成り立つべきである点を明瞭に強調したことをわずかに変更するだけである、と言うだけで十分であろう。貨幣は『慣習によるところ

11) アリストテレスも国際貿易が発生するところでは金属貨幣が必要となることを認識していて、この面でもプラトンと同じである。少なくとも国内の貨幣の論拠は国家によって通用力を与えられたものと考えられるのもプラトンと同じである。

1922年に貨幣の概念を金属地金に求める説の始祖としてアリストテレスを挙げる通説に疑問を提するシンポジウムが開かれた (Cannan, [7], pp. pp. 105-11)。この通説の元凶は14世紀のダンテにある、と指摘したのはそのシンポジウムの参加者のウィックステッドであった。絶えざる貨幣の悪弊に悲鳴を上げた人々によって、貨幣の本質は貨幣自体に価値があるものでなければならないとする14世紀のブリダン (Buridan)、オレスム (Oresme) の説が支持され、それはスペイン、イギリスの重商主義者たちを巻き込み、古典派に流れ込んだのであった。こうして、ノミスマの考え方は背景に押しやられ、持ち運びの便利さ、耐久性、分割性、それ自体の価値、という側面のみが全面に押し出されたのである (Monroe, [25], p. 24; Gordon, [12], p. 614)。最近では、ゴードンの説がある。「貨幣は、貨幣それ自体が内在的に有するなんらかの価値に裏づけられているからこそ貨幣になったというよりも、法の創造物 (*creature of the law*) であるといった方がよい」(Gordon, [12], p. 611)。

の、使用の交換されうる代替物である（倫理学、第5巻・第5章・11）』という句にしても、貨幣は慣習に従って、〈使用される〉交換の手段であることを意味するものである。これ以外に私はこの句を理解できない」（*Ibid.*, p. 63, note; 邦訳、第1分冊、115ページ）。

「私が彼を理論的金属貨幣説に分類したことが正しかったのかどうかについて言えば、私は必ずしも絶対的な確信をもっているわけではない。やがて我々がお目にかかるガリアニは、アリストテレスを正反対の意味に解釈した。基本的諸問題に細かい注意を払わないで著された小冊子の場合には、その著者の考え方を我々が深く精査するにつれて、ますますこのような困難が克服しがたいものになってくる。本文の以下の叙述はこのような点を考慮に入れて読んでいただきたい。私は、自らが確信をもてないのに独断的に主張するよりも、むしろ、読者の前に私の疑問を率直に提起することの方を選びたい」（*Ibid.*, p. 290, note; 邦訳、第2分冊、606ページ）。

シュンペーターが迷ったのは、『ニコマコス倫理学』の一節（前号の引用文4）の解釈である。それは、共同体間における貨幣の発生を指摘した『政治学』の一節とは若干ニュアンスを異にした章句である。ここでは、明確に貨幣が自然形態ではなく、ノモスによって需要の代表者になっていることが示されている。しかし、アリストテレスの非メタリスト的側面を表すものは、『政治学』第1巻、第9章にもある。そこでは、貨幣と富と混同してはならず、申し合わせに基づくものでなくては交換手段としての機能を貨幣は維持できないことが説明されている。

（引用文13）「貨幣が案出されて以来、必要不可欠な交換とは異なった種類の蓄財術（*crematische*）が生じた。商人的なものがそれである。それが生じた初期には、おそらくそれは簡単なものだったろうが、後に人が経験を積むにつれて、どこと、どのような交換をすれば最大の利益があがるかということをやがて知るようになり、いっそう技術的なものになった。この点から見ても、蓄財術は主としてカネに関係するものであり、その術の働きは、どこ

からたくさん財産 (*cremata*) を得ることができるのかを読み取ることだと思われるようになった。それが富や財を作ると見なされているのである。実際にも、富とは貨幣の総量だと見なす人々がしばしばいる。蓄財術にせよ、商人術 (*caperike*) にせよ、貨幣に関係するものだからである。しかし、これとは反対のことも時には考えられている。貨幣はまったく無意味なもの、人によって定められたもの、自然には存在しないものと考えられている。貨幣はその使用者がその貨幣を廃止して他のものを採用すれば、それは塵芥も同然、いかなる生活必需品に対して少しも役立たないからである。実際、貨幣を多くもっていても、必要な食糧に事欠くこともしばしば見られることである。自分の前のものをすべて金に変えてくれとの欲張った祈りがかなえられたために、貨幣を豊富にもちながらも死んでしまったというあのミダス王の物語にもあるように、飢え死にさせるようなものが富というのは奇妙なことである。

それゆえに、富や蓄財術の別の定義を正当にも求める人々もいる。自然にかなった蓄財術、自然にかなった富は別種のものだというのである。それは家政術 (*oikonomica*)¹²⁾ に属するものである。これに対して、商人術は、財を作るもの、それも、なんの努力が払われることなく、ただ財の交換によってのみ作るものである。このことは、貨幣に関係していると思われる。貨幣が交換の出発点であり、目的になってしまっている。しかも、この種の蓄財術には際限がない」(Aristotle, [4], 1257 a 19-1257 b 25; 邦訳, 52-54ページ)。

貨幣は自然のものではなく、人によって定められたものであり、共同体維持に必要な富ではない。にもかかわらず、人々、とくに、商人層は自足性の原則から逸脱した際限なき貨幣蓄積に邁進してしまうという害悪を共同体にもたら

12) *oikonomica* が経済学の語源になったことは確かであるが、*political economy* という用語を最初に使用したのは、1615年のモンクレティエン (Montcretien, [27]) であるという。(Andreades, [2], pp. 81-82) ただし、モンクレティエンは国家が経済過程に介入すべきだという重商主義的な意味においてこの用語を使用した。

している。貨幣は、真の富からすれば無意味なものである。貨幣は、人の合意によって廃止することも変更することもできるものである。つまり、合意さえ形成されれば、貨幣は、一瞬にして無価値なものに転落させられてしまうものである。このことの強調によって、共同体維持に有害な蓄財に励む商人層への嫌悪が表明されているという点が、この文脈においては重要となる。少なくとも、このように、『政治学』の世界においても、『倫理学』の世界と同じ表券貨幣説が展開されている。貨幣を論じるとき、アリストテレスは、つねに共同体の健全な維持という目的意識との関連を重視し続けたのである。そこでは、健全貨幣論よりも貨幣管理論の領域の方が主たる関心事だったと思われる¹³⁾。

IV 共同体 (koinonia) における貨幣 (nomisma)

このような共同体関係維持の視点から貨幣を見直すとき、貨幣を単に交換の媒介物、あるいは、価値の尺度に限定して理解することは許されないだろう。貨幣は共同体維持に貢献するものでなければならない。つまり、それは制御されなければならないものである。もし、貨幣が、共同体を破壊しかねない動きを見れば、それは廃止され、別の貨幣が定められなければならないものとなる。このような制御可能な貨幣とは、金や銀といった自然の産物であってはならない。自然の産物は、人為による制御が不可能なものだからである。

13) シュンペーターのアリストテレスへの市場価格論的接近に反対して、古代ギリシャの調和概念をもっとも基礎的なところから理解しようとしたのがヘンリー・シュビーゲルの仕事であった (Spiegel, [41])。彼は、古代ギリシャ思想の特徴として二極性を指摘する。この二極性が弁証法を発展させたとする。彼はまた、デモクリトス派の主観主義的傾向、つまり、満足度とは供給を増大させるだけではなく、欲望を削減することによっても達成されるものであるとの説に注目した。たとえば、アリストテレスの『政治学』にもそれが現れていると言う。彼によれば、アリストテレスが商人術 (*crematistike*) を不自然なものであり、許容できるものではない (Aristotle, [4], 1246b 40–1258a 20; 邦訳, 53–54ページ) というとき、その真意は貨幣が導入される前の物々交換の世界の自然的な欲望の限界を貨幣導入以後の世界が打ち破り、不自然な欲望の爆発を招来したことへの批判であると理解する。

同様の二極性を行動様式と正義の観点に見ようとしたのが、ローリーである (Lowry, [19], p. 80)。トーマス・ルイスは、友人間の公正な分配という倫理的なものがアリストテレスの思想を支配していたという (Lewis, [18])。

真実には通約できない異質なものの¹⁴⁾、共同体にとってはそれぞれが必要なものである。本稿の第1節で需要と訳したクレイア (*creia*) には必要性という意味も含まれている。そうした共同体にとっての必要性を代表するものが貨幣である。クレイアとの関係が表現されることによって、貨幣は異質なものを通約する共通の尺度となる (Finley, [10], p. 47)¹⁵⁾。

このように、共同体の必要性との文脈において語られるノミスマ (貨幣) を、単純な金属貨幣としてのみ語ることは、たとえ、そのことを表現する文言が散見されるとしても許されないだろう。たとえば、「農夫が靴工に対するように、靴工の生産物は農夫の生産物に対応する」という文言にしても、それを生産費に応じた交換のあり方を論じた箇所として見るのではなく、共同体における人間関係に比例した生産物の配分は、「各自がそれぞれのもち分を得る」形で行なわれなければならないと理解されるべきなのである¹⁶⁾。公正さの基準は貨幣

14) (引用文16)「もちろん、著しく差異のあるあらゆるものが通約されるということは、本当は不可能である。しかし、需要への関係という観点からすれば、そのことは十分に可能である。ただし、そのためには何か単一のものの存在が必要となる。これは契約に基づくものである。これが、ノミスマという名称の所以である」(Aristotle, [3], 1133b 19-22; 邦訳, 110ページ)。

本文でも指摘したように、ここで単一のものというのは、自然の中から得られるものではなく、契約によって表現される共同体の必要性のことである。

(引用文17)「貨幣はすべてのものの尺度として、それらを通約し、均等化する。事実、交換なしには共同関係は存在できない。その交換は均等性なしには存在せず、均等性は通約性なしには存在しない」(Ibid., 1133b 23-29; 邦訳, 110ページ)。

貨幣による通約から異質なものの均等化が行なわれて後、交換が実現し、共同体が維持されるという理路を、第1節で述べたようにマルクスは通約と均等化との順序を取り違えて、同質であるために通約されると誤解した。

15) 引用文2 (前号)にある「あらゆるものを真実に包含する需要」という文言が非常に重要な意味をもっている。ここで言われている需要は、単に市場価格を反映するといった次元に限定して理解されるべきでなく、共同体維持の要請として、共同体成員間の契約として、つまり、共同体維持に必要なものという視点で把握されるべきである。

16) (引用文18)「貨幣がすべてを通約的にさせる。あらゆるものが貨幣によって計量される。Aは家屋、Bは10ムナ、Cはベッド。いま家屋が5ムナに値するならば、すなわち5ムナと等しいならば、AはBの2分の1になる。CであるベッドはBの10分の1。この場合いく台のベッドが1軒の家屋に等しいかは明らかである。5台である。貨幣が存在する以前でも交換はこうにして行なわれていたことは明らかである。5台のベッドが1軒の家屋と交換されると言うことと、5台のベッドが1軒の家屋に値するということとの間には、まったく差異がないからである」(Ibid., 1133b 23-29; 邦訳, 110ページ)。

この「まったく差異がない」の文言をマルクスは、アリストテレスが交換価値を発見したこ

蓄蔵ではなく、自足性に求められねばならないからである。そして、アリストテレスの文脈における公正さとは正義のことに他ならない。

(引用文14)「我々の探求する正義は、絶対的な意味における正義と政治的な意味における正義の両方を指すものであることを忘れてはならない」、「政治的意味における正義とは、自足的であるための共同体生活をおくる自由で、現実的にも比例的に均等人々の間におけるものである」。

「正義というものは、互いに関係を規定する法に人々が帰依するときのみ存在するものである」(Aristotle, [3], 1134 a 24-26; 邦訳, 111ページ)。

アリストテレスは、自足性との関係において自然的性質をもつ家政術 (*oikonomica*) と自然的性質から離れた蓄財術 (*crematistike*) との区別を行なっている (Aristotle, [4], 1256 a 1-5; 邦訳, 47-48ページ)。さらに彼は、真の富とは、ソロンが言ったようには無限に獲得できるものであってはならず、自足性の原則を逸脱しないような、目的に応じた家政と国家とを維持するのに必要なものに限定されなければならないと言う (*Ibid.*, 1256 b 30-34; 邦訳, 50-51ページ)。共同体 (*koinomia*) が個々の家政の範囲に限定されているときはもとより、共同体が家政を越えて成長するようになって、物々交換で個々の家庭の過不足が調整されているかぎり、この種の生産と交換は自足性に基づく自然的な性質を失わなかった。交換はあくまでも生活の自立自足のための不足物を満たすことに限定されていたのである。

ところが、蓄財術は自足性の限界を越えて蓄財自体を目的としてしまう¹⁷⁾。つまり、それは非自然的なものである。アリストテレスは、「各自がそれぞれ

この証左としたのであるが、この「値する」という言葉は、アリストテレスにおいては、生産費であるというよりも、共同体にとっての必要性という意味で使用されていたと見る方が素直に理解できる。

17) ローリーは、トマス・アキナスのアリストテレス論の中に交換の自然的な限界と、貨幣を介在させることによって交換がこの自然的限界を克服してしまうことを指摘していて、この発見が非常に重要であるという (Lowry, [17], pp. 57-63)。しかし、アキナスが受け継いだのは、経済の自然的限界を克服する貨幣の積極的な評価ではなく、そのような事態を招く貨幣の恐ろしい側面への警戒である。

のもち分を得る」状態、つまりある人の利得が他の人の損失にならないという意味においての正義の観点から商人を見ていた (Aristotle, [3], 1133 b 6; 邦訳, 109ページ)。国の命令に従うべく商人を法によって取り締まらなければならないとも言っているように (Aristotle, [4], 1327 a 25-31; 邦訳, 323ページ), 商人が秩序破壊的に動くものと警戒していたのである。彼はあくまでも国家の安全を最高の倫理に置いていた (Finley, [10], p. 18)。顧みるに, 技術的, 物的進展を進歩と見る思想は18世紀以降のものであった。それまでのあらゆる社会理論は物的増進への警戒感に彩られていたのである (*Ibid.*, pp. 20-21)。古代ギリシャの思想家によっては, そのような経済的な富の増進がいわゆる *metics* (外国人居留民) によって担われていたことへの危惧がこれに加わっていたと考えられる。

当時のギリシャに海上貿易の自由市場のあったことはすでにヘロドトスの証言にもあるし (Herodote, [15], Bd. 1, sec. 152-53; 邦訳, 第1巻, 152-53節), クセノホンはそのような自由市場を *agora* と呼んでいる (Xenophon, [45], I. 2. 3)。アリストテレスもクセノホンの *agora* という用語を使用した。しかし, アリストテレスが, 自由という意味を逆に解釈して, 一切の商業取引から自由な (商業取引を禁止されている) 市民の広場を提唱したことに見られるように (Aristotle, [4], 1331 a 30-35; 邦訳, 337-38ページ), アリストテレスにはなみなみならぬ商業活動への反感があった (Finley, [10], p. 22)。これは, 古代ギリシャの市民に共通して見られた現象であった。彼らにとって, *koinonia* (共同体)こそ守られるべきものだった。商業活動は, コイノニアの維持に必要なものであると同時に, それを壊すおそれをも, もつものであった。たとえば, 古代の都市は土地の所有権を制限していた。それは, 特権的市民階級を維持するために取られた制限であった。土地に依存しなければならない貨幣をもたない市民と, 貨幣をもつが市民ではない外国の商人との間に差別を設けていたのである (*Ibid.*, p. 23)。結果的に, 投資の選択幅は狭くなる。土地所有から排除された非市民は, 必然的に工業, 貿易, 金融業で生

きなくてはならなかった。実際的にも、共同体の維持にとって、外国人のこのような活動は不可欠のものであった。したがって、思想の分野での警戒感にもかかわらず、現実の問題として、外国人の商業活動が法で制限されるようなことはなかった¹⁸⁾。それでも、今日の言葉でいう経済が外部の人間によって営まれていた当時の状況が、アリストテレスのようなアテネの思想家にどのような心理的な圧迫を加えていたかを考えれば、アリストテレスが経済、その担い手の外国商人、そしてそれを体現する貨幣に対して、大きな警戒意識をもち、制御されるべき貨幣を合意の産物と見なすようになった理路も理解できるだろう (Finley, [10], p. 25)。

したがって、引用文12におけるアリストテレスの真意は、シュンペーターが解釈したような貨幣発生謎の謎を明らかにすることにあるのではと考えられる。貨幣発生根拠がどこにあり、一度発生した貨幣が共同体維持の原理である自足性の原則を壊してしまったことを彼は強調したのである¹⁹⁾。この文脈を軽視

18) 商業活動の倫理的な理解に苦しんでいたアリストテレスに比して、クセノホンはこの点では、はるかに現実的に問題に接近していた。彼はアテネの収入を増大させるべく *metics* の優遇策を提起していたのである。彼らから兵役の義務を免除すること、彼らに貴族への昇進の道を開くこと、居住用の土地の購買を認めること、訴訟事件を迅速に処理した市場監督者を表彰すること、劇場やその他の席での特権的優遇を与えること、滞在用宿舎と市場の数を増やすこと、等々である。それだけではない。クセノホンはためらいながらも、国家が商業船を彼らに貸しつけることすら推奨している。また、積極的に奴隷を購入して鉱山所有者に彼らを貸しつけた人が財産を築いているという事実注目して、国家がそのような事業を開始しても良いとまで言う (Xenophon, [38], 4. 83)。

19) 貨幣への恐怖感とは、共同体への信頼が貨幣への信頼と同義であり、共同体が存続するかぎり貨幣は存続できる、との考え方の裏返しであると理解することができるだろう。

(引用文19)「貨幣も他のものと同じ傾向を避けられないのは当然である。それはいつでも同じ価値をもつとは言えない。それでも、他のものに比べると価値安定がより長く持続する傾向を備えている」(Aristotle, [3], 1133b 13-15; 邦訳, 110ページ)。
という章句は、すべての事物には利子がつき、貨幣のそれがもっとも高いのは他のものに比べても貨幣の価値低下が少ないからであるとのケインズの考え方に通じるものがある。これも、貨幣が共同体関係を代表する人為の産物であることによる。

(引用文20)「貨幣は、たとえ我々が現在のところは何ものをも必要としなくても、後になって必要になるものが出てくれば、そのときに、それを入手できる未来の交換の保証として役立つ。貨幣をもって行けば、所要のものを得られるはずだからである」(Ibid., 1133b 11-12; 邦訳, 110ページ)。

販売と購買との時間的な分離を可能とするのも貨幣が共同体社会の合意の産物だからである。そのことは、共同体が維持されるかぎりにおいて、貨幣の信託が持続されることを意味している。

して金属の素材の側面のみに目を奪われると、貨幣に対するアリストテレスの嫌悪感のもつ意味を理解することができなくなってしまう。交換の必要性から貨幣は発生した。それは抗することのできない自然の流れである。しかし、この貨幣が人々をして自足性の枠を踏み出した貨幣蓄財欲を駆り立てる危険性は、なんらかの方法で抑制されなければならない。これがアリストテレスのもっとも訴えたかった含意である。つぎの引用文15は、そのような蓄財衝動に駆られる商人層に対する批判である。

(引用文15) 「蓄財術には二種類あって、そのうちの1つは商人術で、他の1つは家政術の一部である。後者は必要不可欠のものであるが、前者は非難されてしかるべき交換に関するものである(それは自然に合致したものではなく、人間が相互から財を得るものだからである)。したがって、憎まれてもっとも当然なのは高利貸しである。それは彼の財が貨幣そのものから得られるのであって、貨幣がそのことのために作られた当のもの(交換の過程)から得られるものではないからである。貨幣は交換のために作られたものであるが、利子は貨幣をいっそう多くするものである。(ここから利子…*topos* という名も生まれた。その名は生まれたものとそれを生んだものが似ているところからきている。利子は貨幣の子である貨幣として生まれる)したがって、これは蓄財術としてはもっとも自然に反したものである」(Aristotle, [4], 1258 a 39–1258 b 8; 邦訳, 57ページ)²⁰⁾。

彼はあくまでも、アテネ的な共同体的国家の安全の維持を最高目標に置いていた (Finley, [10], p. 18)。少なくとも言えることは、アリストテレスが自分の時代に反抗していたことである。彼はフィリップ王、アレキサンダー王の治世に批判的であったし、その結果出てきたポリスにも批判的であった。当時繁

20) アリストテレスの利子への嫌悪は、利子が余剰の浪費になるとの考え方に基づいている。ローリーによれば、アリストテレス『政治学』第1巻の目標は、増大する人口を維持するために余剰が使用されなければならない。商人の私腹を肥やすためにそれが浪費されてはならないという点にある。余剰は個人の自己改善のために使用されなくてはならない、とアリストテレスは考えていた (Lowry, [19], p. 76)。

栄を見せていた商業や蓄財を彼は嫌悪した²¹⁾。このことは、貨幣発生 of 必然性を十分に認識しながらも、貨幣がもつ共同体破壊の可能性を強く警戒し、可能なかぎり貨幣の一人歩きを制御することに、アリストテレスの力点があったことを示すものであろう。このように、『政治学』第1巻を論拠としてアリストテレスに金属貨幣説を見ようとしたシュンペーターの理解に反して、『政治学』の世界においてすら、表券貨幣説を貨幣制御必要論との関わりで見出すことができるのである。

現代のパラダイムの転換を意図して過去の偉大な天才に学ぼうとするならともかく、パラダイム転換の意思なくして、過去の幼稚さをあげつらうことは、たとえ、科学的な経済分析の発生史を叙述するという建て前のものであっても²²⁾、現代とまったく異なるパラダイムの上に立つ思想を扱う姿勢としては二重の意味で誤っているであろう。少なくとも、アリストテレスは、経済現象を客観的に扱うことはしなかった。ところが、シュンペーターは、市場分析を拒否しようとする論者に市場分析の道具立ての始祖を見出そうとする。そのような作業に、シュンペーター自身が戒めた単なる遊戯以上のどのような意味があるのだろうか。また、経済分析のみに力点を置くことは、逆の科学上の錯誤への修正をしにくくさせてしまうだろう。たとえば、共同体関係維持に最大の価値観をもつアリストテレスの貨幣論の揺れ（必要性と危険性）を、金属貨幣説の不徹底さの現れであると見なしてしまうことは、貨幣の管理されなければな

21) ポランニーは言う。「アリストテレスは、後の論者がその主題においてかなわないほどの急進主義をもって、人間の生活問題に挑戦した人であると見なされるべきである。彼ほど深く人間生活における物的組織に分け行った人はいなかった。実際、彼は全身全霊をもって経済が社会に位置づける場の問題を提出したのである」(Polanyi, [30], p. 66)。そこに見出されるものは、交換における正義が、契約の思想を社会的に擦り込む姿勢である。

22) シュビエゲルは、アリストテレスの中に限界効用理論の萌芽を見、スタンレー・ジェヴォンズがそこから大きな影響を受けたと考え、ウィリアム・サッフェにいたっては、ゴッセンやエッジワースもアリストテレスに影響されたという(Jaffe, [16], pp. 381-404)。クセノホンの経済学を無視したシュンペーターに対して、ゴードンは逆にクセノホンを非常に高く評価する。クセノホンの『方法と手段』には収穫一定と収穫逡減の分析を行なっている(Gordon, [12], p.19)。彼はまた、ヘシオドスに稀少性の概念をも見る。農業が収穫逡減、鉱山が収穫一定というのである(Ibid., p. 19)。この認識の上に立ってゴードンはクセノホンに管理経営計画の思想を読み取る。

らない側面を反省的に再考せず、いたずらに、競争価格論や利子論の欠如を指摘することで終わってしまうことになる。

しかし、たとえ壮大な上部構造が構築されていても、それが依拠するパラダイムが時代の要請に応じられなかったために、時代への影響力を急速に喪失するにいたった経験を私たちはいくつかもっている。誕生初期には軽薄な風俗的な思潮がしだいに時代精神と呼ばれるようになり、過去のパラダイムに沿う科学を崩壊させる力を見つけたという経験を私たちはしてきた。科学と思想とは異なるとうそぶいたところで、重厚で科学的であると見なされる経済分析が、平板で自己弁明的な記述に同時代への影響力の点で席を奪われてきたという事実を私たちは痛みとともに経験してきた。パラダイムの転換が必要になったとき、科学というものの空しさは、歴史のいたるところで表現されている。この局面をシュンペーター自身はヴィジョン論として意識していたはずであるが、これは十分展開されたわけではなかった。経済分析が過度に純粋化された経済現象を経済決定論的に処理するという論理操作がいたるところで行き詰まっている今日、別のパラダイムを過去に探そうとする姿勢を取らないかぎり、古典を紐とく意義のすべては失われることになる。しかし、多くの古典研究は、今日のパラダイムに沿う経済分析の萌芽を求めることに終始し、そこから別のパラダイムを学ぶことをしなかったのである²³⁾。

23) ここで想起されることは、アダム・スミスがグラスゴー大学の哲学教授の就任講義でプラトンのイデア論を論じたことである。これは後に公刊され、さらに、『道徳感情論』では、古代ギリシャに対して現代社会が弱々しい状態になっていることを嘆いているように、スミスはギリシャ思想を非常に高く評価していた (Smith, [37], VII, Sec. II, chap. I)。

参考文献

- (1) Alter, Max, "Aristotle and the Metallist Tradition: a Note", *History of Political Economy*, Vol. 14, No. 4, Winter 1982.
- (2) Andreades, Andreas M., *A History of Greek Public Finance*, Vol. I, revised edition, translated by Carrol N. Brown. Cambridge, Mas., Harvard University Press, 1928.
- (3) Aristotle, (W. D. Ross ed.), *The Works of Aristotle*, Oxford University Press, Vol. IX, *Ethica Nichomachea*, 1915.; 邦訳 高田三郎訳, 『ニコマコス倫理学』(『世界の大思想』第20巻, 『アリストテレス』, 河出書房新社, 1974年。
- (4) ———, Vol. X, *Politica*, 1921.; 邦訳 山本光雄訳, 『アリストテレス, 政治学』, 岩波文庫, 1961年。
- (5) Blaug, M., *Economic Theory in Retrospect*, Homewood, Illinois, 1962.; 邦訳 杉原四郎・宮崎犀一訳, 『経済理論の歴史』, 東洋経済新報社, 1968年。
- (6) von Böhm-Bawerk, Eugen, *Zum Abschluss des Marxischen System*, in Eugen von Böhm-Bawerks kleinere Abhandlungen über Kapital und Zins (*Die gesammelte Schriften*, Bd. 2), Wien und Leipzig, 1926.; 邦訳 木本幸造訳, 『マルクス体系の終結』, 未来社, 1979年。
- (7) Cannan, E., Ross, W. D., Bonar, J., Wicksteed, P. H., "Who Said Barren Metal?", *Economica*, No. 5, June 1922.
- (8) Castoriadis, Cornelius, "From Marx to Aristotle, from Aristotle to Us", *Social Research*, Vol. 45, No. 4, Winter 1978.
- (9) Clagett, Marshal, *Greek Science in Antiquity*, New York, Abelard-Schuman, 1955.
- (10) Finley, Moses I., "Aristotle and Economic Analysis", *Past & Present*, Vol. 47, May 1970.
- (11) Gomperz, Theodor, *Greek Thinkers: a History of Ancient Philosophy*, translated by Laurie Magnus and George G. Berry from the German edition of 1986, New York, Humanities Press, 1955.
- (12) Gordon, Barry J., "Aristotle, Schumpeter, and the Metallist Tradition", *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 75, No. 4, Nov. 1961.
- (13) ———, "Aristotle and Hesiod: The Economic Problem in Greek Thought", *Rev. Soc. Econ.*, Vol. 11, Sept. 1963.
- (14) ———, *Economic Analysis before Adam Smith: Hesiod to Lessius*, New York, Harnes & Noble, 1975.
- (15) Herodote, *Herodoti Historiae*, 2 vols, edited by C. Hude, Oxford Classical

- Texts.; 邦訳, 松平千秋訳, 『ヘロドトス歴史』, 岩波文庫 (全3冊), 上巻。
- (16) Jaffe, William, "Edgeworth's Contract Curve: Part 2. Two Figures in its Protophory: Aristotle and Gossen", *History of Political Economy*, Vol. 6, No. 4, Winter 1974.
 - (17) Kern, William, "Returning to Aristotelian Paradigm. Daly and Schmacher", *History of Political Economy*, Vol. 15, No. 4, Winter 1983.
 - (18) Lewis, Thomas, J., "Acquisition and Anxiety: Aristotle's Case against the Market", *Canadian Journal of Economics*, Vol. 11, No. 1, Feb. 1978.
 - (19) Lowry, S. Todd, "Aristotle's 'Natural Limit' and the Economics of Price Regulation", *Greek, Roman and Byzantine Studies*, Vol. 15, No. 1, Spring 1974.
 - (20) ———, "Recent Literature on Ancient Greek Economic Thought" *Journal of Economic Literature*, Vol. XVII, March 1979.
 - (21) Marx, Karl; *Das Kapital*, Bd. 1, in *Karl Marx, Friedrich Engels Werke*. Bd. 23, Berlin, 1975.; 邦訳, 向坂逸郎訳, 『資本論』, 岩波書店。
 - (22) Meek, Ronald L. and Skinner, Andrew S., "The Development of Adam Smith's Ideas on the Division of Labour", *Economic Journal*, Vol. 8, No. 332, Dec. 1973.
 - (23) Menger, Carl, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, in *Carl Menger gesammelte Werke*, Bd. 2, Aufl., Tübingen, 1968.; 邦訳, 安井琢磨訳, 『国民経済学原理』, 日本評論社, 1937年。
 - (24) 望月俊昭, 「価値形態論における『本質の同等性』について」, 『経済研究』(成城大学), 第75号, 1981年10月。
 - (25) Monroe, A. E., *Monetary Theory before Adam Smith*, Cambridge, Mas., 1923.
 - (26) ———, *Early Economic Thought*, London, 1924.
 - (27) de Montchrétien, Antoine, *Traite de l'oeconomie politique*, 1615.
 - (28) Plato, *The Collected Dialogues of Plato*, edited by Edith Hamilton and Huntington Cairns, Bollingen Series, No. 71, New York, Pantheon Books, 1961, *Statesman*, translated by J. B. Skemp.
 - (29) ———, *The Laws*, translated by R. G. Bury, Harvard University Press, 1952, Bk. V.
 - (30) Polanyi, Karl, Arensberg, Conrad M. and Pearson, Harry W., eds., *Trade and Market in the Early Empires: Economies in History and Theory*, Glencoe, Ill.: Free Press, 1957.
 - (31) ———, *Primitive, Archaic, and Modern Economies*, edited by G. Dalton, Garden City, N. Y., 1968.
 - (32) Roll, Eric, *A History of Economic Thought*, 3rd edn, London, 1954.

- (33) Schumpeter, Joseph, *A History of Economic Analysis*, edited by Elizabeth Boody Schumpeter, New York, Oxford University Press, 1954.; Allen and Unwin, 1959.; 邦訳, 東畑精一訳, 『経済分析の歴史』, 全7巻, 岩波書店, 1955年。
- (34) ———, *Ten Great Economists from Marx to Keynes*, New York, 1951.; 邦訳, 中山伊知郎・東畑精一郎監修, 『十大経済学者』, 日本評論社, 1952年。
- (35) Simmel, Georg, *Philosophie des Geldes*, München und Leipzig, 1920.; 邦訳, 元浜晴海・居安正・向井守訳, 『貨幣の哲学』, 分析編, 白水社, 1981年。
- (36) Singer, Kurt, "Oikonomia: An Inquiry into the Beginnings of Economic Thought and Language", *Kyklos*, Vol. II, No. 1, 1958.
- (37) Smith, Adam, *The Theory of Moral Sentiments*, London, A. Millar, 1759.
- (38) ———, "The History of the Ancient Logic and Metaphysics", in *Essays on Philosophical Subject*, London, T. Cadell and W. Davies, 1795.
- (39) Soundek, Joseph, "Aristotle's Theory of Exchange: an Inquiry into the Origin of Economic Analysis", *Proc. Amer. Philos. Soc.*, Vol. xcvi, No. 30, 1952.
- (40) ———, "Leonardo Bruni and his Public: A Statistical and Interpretative Study of his Annotated Latin Version of the (Pseudo-) Aristotelian Economics" in *Studies in Medieval and Renaissance History*, Vol. V, edited by William M. Bowsky. Lincoln, University of Nebraska Press, 1969.
- (41) Spiegel, Henry W., *The Growth of Economic Thought*, Englewood Cliffs, N. J., Prentice-Hall, 1971.
- (42) 宇野弘藏, 『マルクス経済学原理論の研究』, 岩波書店, 1959年。
- (43) ———, 『経済学方法論』, 東京大学出版会, 1962年。
- (44) Will, Edouard, "De l'aspect éthique des origines grecques de la monnaie", *Rev. Hist.*, Vol. ccxii, 1954.
- (45) Xenophon, *Cyropaedia*, translated by Walter Miller, New York, Macmillan, 1914.